

句集 「オンコール」

2016. 1

人間の業の手触り去年今年

燭台の蠟こそぎをり煤籠

風邪声の犬の吠ゆるや露地の奥

元日や切って捨てたる大根葉

大根の水より冷ゆる白さかな

元日をふるまふ母の思ほゆる

無用者の系譜大樹に蔦枯るる

初夢やわれには遠き思ひ人

正月はなぜか遺影と眼が合ふて

寝正月遺影を避けて肘枕

年始客に遺影の巡（めぐ）りも賑はひて

枯芒枯れてはますぐに風を受く

鬼野芥子白く耄（ほう）けし枯野かな

蠟梅の黄葉を残して咲きにけり

寒鳥しほたれをれば背に鳴けり

早梅もかの一生（ひとよ）あり惜しむなよ

早梅や季（とき）至らぬは淋しけれ

早梅の先散る一生（ひとよ）惜しむなよ

早梅の先逝く一生（ひとよ）惜しむなよ

爺爺のワキ板に付き小正月

年々に味うすくなり薺粥

薺粥諍ふ種に事欠かず

人日のテロ引切なし句が詠めぬ

人日にテロ打ち続き粥噴けり

人日のひば垣を刈る匂ひかな

初夢やわれに遥かの思ひ人

買初や澄雄句集の澄雄の字

寒鴉弄びしがわれに飛ぶ

父逝きて万両殖えし庭の内

山越しの弥陀の御座（おは）すや初二上

初句会水琴窟の塚ほとり

風呂吹の鍋ねんねこにくるみあり

人日の外（と）つ国のテロ粥噴けり

櫛（くぬぎ）葉も一遍旅寝の厚さかな

後影一遍上人初焚火

老い二人畏みもせず屠蘇の膳

連結に老い二人ゐて初詣

鏡餅返して罅（ひび）の深さかな

櫛（くぬぎ）葉も一遍旅寝の褥かな

阿修羅の絵巻きて賜る寒昂

放蕩の祖父に倣ひしごんぼ絢ひ

ごんぼうの火を得てねじれ解き放つ

不意のハグわが背に軍手悴める

亡き人のわが心の坐水仙花

大寒の毛脛ぶつけし痛さかな

大寒や干し物叩く妻の音

裸木の末（うれ）の癖むも美しく

紅梅の徒長枝に染む寒の紅

玄冬や善哉の灰汁取りきれず

龍の玉十年（ととせ）なほ聞く人の声

第二芸術論とふいけず春愁ひ

大審問官虚子のだんまり龍の玉

大審問官虚子の蔵する龍の玉

大審問官虚子俳三味冬の苔

大審問官虚子の哄笑寒鴉

大審問官虚子の諷詠月冴ゆる

貫きて薄氷（うすらひ）とどむる池の葦

十年（ととせ）なほ声みみぞこに龍の玉

裸木の雪が靡きて幽かなる

薄ら雪古塚（ふるづか）くだる靴の跡

死なしめし思ひもて切る水仙花

佇めば枯葉小走る音も止む

木蓮の花思はする太芽ぐみ

裸木の雪散りかかる幽（かそけ）さや

死なしめし思ひに挿せり水仙花

2016. 2

叱咤する声も降り来る冬日向

早梅や病ひ抜けして呆くるも

石階（いしばし）に片手袋の凍ててあり

水仙の丈が遺影に適ひけり

すでにして霰暗峠（くらがりとうげ）越え

人嫌ひとばかりは言へぬ龍の玉

鴉声（あせい）今まねびし君に春立ちぬ
節分の陽（ひ）の斑（ふ）の淡し鰯喰ふ

（近つ博物館にて）

吹きぬけに銅鐸打つや春立ちぬ

置く霜の葉末縁取る草生（くさふ）かな

末（うら）枯れて末に霜おく草生かな

玻璃内は欠伸の世界春浅し

立春に電波時計の遅れをり

CTの声降り来たり寒鴉

CTの声言ふがまま寒鴉

妻のチョコ遺影に映ゆる余寒かな

冬木立鴉の気迫を支へけり

古塚に梅の香を聞く閑けさや

薄氷や漣光る片辺（かたほとり）

息白し肺腑画像の深宇宙

雨だれの中に梅の芽鎮座して

薄氷や貫く葦に動かざる

噛み切れぬ海鼠にあたる迷い箸

約（つづ）めれば裸木烟（けぶ）る美しさ

甘噛みのごと罵りてクロツカス

「息とめて」声降り来たり冴返る

「息とめて」目を瞑り聞く涅槃西風

裸木や末（うれ）まで日向日陰あり

啄ばまれ冬の金柑地に匂ふ

息をとめてと声降り来たり冴返る

息をとめてと目を瞑り聞く涅槃西風
露の臺傷みやすきを惜しみけり
露味憎に荒微塵の青残りをり
啄ばみし金柑匂ふ霜崩れ
薄氷や漣光る片辺（かたほとり）
誘ひて座敷の試歩や春時雨
春浅し妻を同士にこの十年（ととせ）
俳句にもボケとツッコミクロッカス
使徒マタイのごとき吏員や納税す
西行の袈裟の背広し春一番
西行の老いの背広し春一番
風花やわれにゆくへの知れぬ人
甘噛みのごと罵りていぬふぐり
母の試歩座敷に誘なふ春時雨
背（せな） 広き袈裟の西行春一番
老農の法螺一抱への売り水菜
侘助や光るは群葉ばかりなり
近つ飛鳥に雨水の校舎丹の門扉
露の臺研ぎ細りの鎌匂ひけり
人待てば梅も香り来風溜まり
ひとつ影胸に抱ふる雨水かな
春昼やひとつとぼれる雛の灯
はたはたと爆音降れる梅の雲
いとけなきものの手触り露の臺

（弘川寺の桜を想い）

西行桜もふむむ寒さのきのふけふ
車椅子の手邪険にミモザ払ひけり
靴先で踏む薄氷に軋むもの
西行桜も竦む寒さのきのふけふ
約まりは私俳句いぬめぐり
梅の木の癖み構へて花揺れず
初座り雛に真顔の手を伸べて
父の一期に隠れ煙草も雁帰る
約まりは呆（ほう）けの賛美亀鳴けり
弱き日の裸木の影踏みてゆく
一句だに成らぬ四温の鳥の糞
家々の禍福のあざなひ梅紅白

2016. 3

孫娘生れて雛の家となり
雛も坐に曾祖母もゐて初坐り
かながきで孫にしたたたむ雛の句
片肺の古紅梅も老いの花
彼我の差は喪ひしもの四温光
をのこなる遺影のまへのめをとびな
種袋息吹き込めば種跳ぬる
お水取り白木蓮のほぐれそむ
お水取り溝より鼬のひよんと出て
お水取り母晩年に焦がれけり
おほかたは腑に落ちてをり四温光
きのふけふ四温に闌けし露の臺

露の臺雨の窓辺に水涸れて

心的外傷くそつ喰らえや涅槃西風

(3・11震災忌に寄せて)

四温光ふしぎのくにの春障子

六回忌ふしぎのくにの春障子

年々に白木蓮の白まさる

春耕の農の託つも今日の朝

来る日の日向水木も地震(なる)に揺れ

なほ明るくて蝕のある日の春障子

われもまた魂呼びしこと春の風

とんぼりに浴衣も寒し春の場所

少年の悲しみごとや桜貝

なほ明るくて日蝕の日の春障子

種袋息吹き込めば種跳ねる

句坐に聞く訃報はさびし落椿

ぼうたんの葉芽と思ふもこの赤芽

良寛の朱墨の筆や牡丹の芽

残り鴨ゆき暮れ池の杭の先

白梅に薬も混じりて紅をさす

芍薬のすでにしてこのたをやか芽

水皺のとどまる浅瀬春眠し

春眠や自爆テロなきバスの背に

良寛の筆みづみづし牡丹の芽

千年の塚となりたる巖温し

悲しみのまま懐かしく四温光

西行の老いの背広し春一番 (弘川寺)

入り彼岸日向水木の暮れ残り

初蝶や風を纏はぬ老いわれに

はくれんや花の昇天とふうつつ

初花を目聡く指せり病抜け

春の齒科余命数へて待つ温さ

自足するもののかたはら樟落葉

死者生(あ)るる王陵の谷山桜

余命得て友の目聡し初桜

春昼を仏間をぐらき蓮如の書

朧影二上も女男(めを)寄り添ひて

長閑さやわが身に余る長き影

ひと亡くてふしぎのくにの花明り

不登校子の眼けぶたし花蘇枋

春事の父の句があり農せぬに

長閑しやわが身に余る影の丈

たんぽぽの絮の全(また)きを奇跡とも

たんぽぽの絮たましひを吹くやうに

筋かへてますぐに去年(こぞ)の桃の花

けふあすの犬の一期や花三分

2016. 4

ひと亡くてふしぎのくにの春障子 nzn

ひと亡くてふしぎのくにの四温光

六回忌ふしぎのくにの春座敷

悲しみのまま懐かしく四温光

われもまた魂呼びしこと春の風

年々に白木蓮の白まさる

今生に散る花浴びて人とゐる

ゆくりなく西行塚に花の風 (弘川寺)

仏足の大きかるべし万愚節 (薬師寺)

たんぽぽの呆けし絮の抽んでて

芽山椒かたつむりゐる枝避けて

チューリップ花摘むを妻ためらはず

混信の声幽けくも花の下

雨に撓ふを双手に享けし花の房

過去帳にわが筆の拙花の冷え

花の屑たましひほどの一掴み

いにしへの登り窯跡初蕨

枝透けてででむし見ゆる山椒の芽

花屑の踏み跡先に逝かしめき

花屑を託つ友あり掃く身には

羨道(せんだう)に風通るらし花の屑

花屑に混じる尾羽を犬嗅げり

花の屑たましひほどの一つまみ

枝透けて蝸牛ゐる山椒の芽

不参加のはがきで扇ぐ竹の秋

ことまつり農せぬ妻の草の餅

諸花の呆け絮となる日永かな

腹ばひて蝌蚪のさざめき聴くつもり

翁面春陰にひげ煤けをり

尼寺のめぐり雉（きぎす）のめをとかな

春耕や墓じまひする家の田も

たんぽぽの呆け絮伸びる日永かな

腹ばひて蝌蚪（くわと）の声を聴くつもり

花喰らふ雉子（きぎす）の声の濁りけり

一握の花屑ほろと掌をこぼる

たんぽぽの呆け絮伸びるそぞろの歩

たんぽぽの呆け絮伸びる旧りゆくも

たんぽぽの呆け絮伸びる老いの丈

旧りゆくを年々細（くわ）しき芽吹きかな

はなずはう日裏に色を深めけり

山吹を教へし母の眉ぼくろ

菜の花の香の吹流し過りけり

案内声黄泉と漏れくる藤の花

（近つ飛鳥博物館）

冬の痒み脛に残れり山躑躅

松花粉チエルノブイリの日も奈良に

チューリップ崩るるばかり真夜の地震

おほかたは蛇わが前を過ぎりけり

同窓会行かぬと決めて竹の秋

盗掘の目もて石室の穴惑い 秋

盗掘の眼もて塚の穴まどひ

羨道に水垂るるごと山の藤

亡き人のつらきこと聞く白雨かな

大蝸牛淡海を曳くや春の地震 滋賀で地震なし番外

春怒涛死者に叫びし声いずこ 番外
ぼうたんや美僧の経もゆるらかに
桜しべ色の名残のかさばらず
いのししの狼藉と云ふ山躑躅
ゆくりなくうわみずざくら隠れ塚
抱き帯に素足突き出ししやぼん玉
蹉跎たりと云へど今年の牡丹かな
うつ伏せの水瓶揺るる春の地震
盗掘の眼もて穴出づ塚の蛇
仰のけに手枕冷ゆる紫雲英草
をさなうた浮き足立ちて花水木
抱き帯に素足突き出し鯉の風
鉄条網の内外（うちそと）あやめ咲いてをり
ひとつこと老いに移れり牡丹散る
今生に吹かるる今を帚草
蓬摘むチェルノブイリの日の妻と
芍薬のつぼみの紅にけふの夜雨
地震に咲き十日の牡丹散りにけり
昨夜（きぞ）冷えて芍薬の紅解けぬまま
ふためける子蜥蜴未だ歩の前に
春昼の過去帳父の開き癖

2016.5

命終に耳は残ると亀鳴くや
芍薬の初花桶に寝かせけり
まむしの屍しの字をなほも突きをり

兵たりしは一生ものか更衣

甲斐犬と老骨駆ける立夏かな

夕立ちて謀反の匂ひと思ひけり

亡き人のつらきこと聞く白雨かな

兵たりし父の折目や更衣

卯月けふ青深み待つ昼の月

緑陰に農らゐて何云ふでなく

ひとりごと聞くはあはれや葱の苗

理科室に天蚕（てんさん）の繭うすみどり

街道は塔にますぐや鯉のぼり

後退る試歩の背中の新樹光

父の便りの古色涼しき袋棚

水風船の爆弾抱へ素足の娘

空華の句あつゆきの句やえごの花

論文がすなはち遺稿短夜や

余花の雨引用の数空しとも

身軽さの孫の寝相やさくらんぼ

人見知り十薬の香に目をあぐる

夏ごろも笑ひて小さき歯が二本

笛好きなくせ風に怯えて青嵐

孫もつまむ塩加減よき豆の飯

夏の棘零さずに剪る山椒の木

炎天の棘の影濃き山椒かな

炎天や山椒は人の手を嫌ひ

不幸とは決して思はず花山椒

検閲朱暑中見舞の父の字に
掌の窪に仁丹ほどのかたつむり
夏の蝶寄れば渦巻き渦を解き
ふためきて溝跳び越えし蜥蜴の子
三月堂出て夕ごろ葛の餅
乳の孫抱きたき妻の卯月旅
鬼百合や庭に鬼の字佳かりける
救世観音笑まひておはす卯月の忌
手の風で燭吹き消すや夏座布団
焙じ茶の茶粥がうまし溝浚へ
「ヒバクシャの声絶ゆる日」の白雨かな
原子野に十薬生えしその十薬か
去年（こぞ）の空蟬けふ潰しけりオバマの日
二上の夜は死者の声牛蛙
十薬や茶粥冷たきまま啜る

2016. 6

実梅仰ぎ一人は癌の病明け
さへづりの最中（もなか）のひばり見逃さず
蚊の姥のすがる網戸の素通しや
ほうたると呼ばふは魂を呼ばふかな
十年忌「ハロー・グッバイ」の夏埃
宵語り孫のますぐな目が涼し
越の妻の伊吹焦がるる梅雨入（ついでり）かな
夢に爪たつる思ひに桃を剥く
二上を弟背（いろせ）と呼びし栗の花

ほたるぶくろや姉弟仲が良すぎるも
去年（こぞ）の殻空蟬となる青葉闇
むかで打ちその昂ぶりの夢に入る
おほせにて百足千匹ころしけり
ほたるぶくろや妻は遺灰と逝くつもり
紫陽花や老いのいのちの濃さ淡さ
死者のなき家の稀らや濃紫陽花
夏薊棘あるものの生き急ぎ
ほたるぶくろやよう納めずに子の遺灰
混信を消せば白百合匂ひけり
白雨消えくぬぎになほも雨の音
くちなしの花に名札の裏返る
蚊の姥の覗く網戸の素通しや
ほたるぶくろやよう手放さぬ子の遺灰
浜木綿や花も投地の祈りかな
葡萄山廃れてへくそかずらかな
死ににゆく日もそそくさと濃紫陽花
息を止めてと神にあらねど声涼し
やや（嬰）の風けふかをりたち合歡の花
棕櫚の花たたかいごとの花つぶて
異装賢治の一人芝居や凌霄花
腫瘍と云へど影の濃淡濃紫陽花

2016. 7

息を止めてと造影剤の闇暑し
豎笛の音漏れ来たり立葵

咲きのぼる順次よろしき立葵

わが一生（ひとよ）のひとつ試練や雨蚩

戒名はフォトン（光子）の由来夏星座

帰省子の蹠白しうつ伏せ寝

胃カメラの喉元すぎる小暑かな

胃壁染めがくあじさいの花の幻

十葉やグランド・ゼロを花の薬

悠然と夏河の鯉エノラ・ゲイ

遠き日のわれを見し夜の鰯雲

香水やすでに忘れし母の声

帰省子の蹠白しうつ伏せ寝

羅の襟首立ちし師の氣息

道をしへいづれが遊び心かな

打水に手負いの蜂も流れけり

紙魚喰ひし憲法号外昼寢覚

凌霄花百の科白を覚えし娘

心経に初蟬の声老いの声

迷い蟬放ち闇などなき夜闇（やあん）

蕨餅妻の手にして透きゆけり

浜木綿の豊かに咲きて尋ねらる

鱧抓み腹腔鏡の話など

紙焼けの憲法官報涼に伏す

新憲法の官報号外昼寢覚

別嬪さんのころはモノクロ酔芙蓉

八年を兵たりし父新豆腐

桔梗（きちかう）や兵たりしこと一代（ひとよ）もの

新涼や手の風で消すお灯明

あくる日の西瓜提灯踏み潰す

声失せし妣の項の土用灸

人来る遺稿の縁（えにし） 蝉時雨

宣告のさあれ仏間の昼寢覚

わが庭の蝉あがく音夜に間遠

手負いの目撮らずに離る青葉闇

宣告をさらりと受けし蟻地獄

医の庭にけふの芙蓉の一期かな

吾が生も既に蹉跎たり白芙蓉

病床に己曝して昼蛩

昨（さく） 一日青き便出ず桔梗咲く

蝉時雨先逝くものの尊けれ

桔梗咲く病院なれば死にがたし

蝉の穴腹腔鏡に覗かるる

空蝉の時経て夕べ麻酔覚む

2016. 8

自墮落に麻の作務衣を術前夜

術の朝夕立予報眼底に

夏の雲術後二日の微熱にゐ

病室に妻の気配の団扇風

しんどいのことばよろしも夏病

（PLの花火が見え）

待たるるに放屁もありて遠花火

ながらへてふぬけの響き遠花火

(血を抜くドレインが鯨の骨に見えて)

遠花火鯨の骨を抱いて寝る

ががんぼが病棟の音聴きてをり

腸(はらわた)を抜かれて西瓜提灯や

妻は見て吾(あ)は見ぬ臓器からすうり

病とは夏無為にゐてなほ主(おも)な

風船蔓ふと点滴に纏(まつ)はるる

人生のやや窮まりて炎天下

水風船をぶつけし少女原爆忌

左腎成仏したる今朝の秋

剥き桃を成仏掴むごとくゐる

かなかなのいのちおさめて逝くごとし

いのち細るやけふ新涼のくきやかに

白粥に術後の初秋養へり

新涼や耳に馴染まぬ老いの声

師も病みぬわれも病みをり熱帯夜

露思はぬに遺影となりし笑み哀れ

水風船を抱へ少女よ原爆忌

交響曲HIROSHIMA騙るサングラス

「キミヨウナリズム」が俺には見えぬ広島

(原民喜の詩に「死体ノキミヨウナリズム」という一節) 8/11

父の銃創わが腹腔鏡蟬の穴

つくづくをしと外つ国に逝き十年(ととせ)の忌

七十一の素数の蟬や敗戦忌

(南京事件の年の古写真に南瓜の神輿が)

南京の神輿や銃後の母もゐて

(病氣療養中の師の話)

玉音を境に書類燃やす日々

傷口のいまだ痛むも敗戦忌

父母もゐて病後養ふ夏座敷

癒なんと自墮落にゐる秋暑かな

臆ひとつ失ひてゆく花野かな

二上山(ふたかみ)を背に妻の指す昼の月

虹柱上(かみ)つ下(しも)つと立ちにけり

撮りてけふ有明の月小さきこと

不機嫌は昭和の名残鴟日和

(大浦さんの訃に寄せて)

落蟬や母の悲しみ負ひ逝けり

2016.9

太子道に道標暮れて地蔵盆

秋灯や良寛歌集も捨てごろか

颱風が軍事機密でありしころ

垂直に日差しを登る蜥蜴かな

打ちつばなしの壁の居心地秋燕

バーコードの棒と化し果て夏患者

バーコード翳して点滴今朝の秋

直(ひた)と告げらるいのちのことや百日紅

虫時雨今生の夜の真中(まなか)かな

夢現(ゆめうつつ)われ持ち上げよ虫の闇

忌を重ね人老いゆくや葛の花

長月の香（こう）の香（か）のまづ爽やかに

落し文拾ひし妻の見せず捨つ

閑人となりて見上ぐる鰯雲

長月の香煙のまづ爽やかに

をらぬこと幾日重ねて帰燕かな

閑人となりて見上ぐる鰯雲

忌を重ね人老いゆくや葛の花

秋灯や良寛歌集も捨てごろか

戦争の世紀の梨のけふ美味し

生（な）りやうの疎らに熟れし山葡萄

一本の竹伐りてその夜の月天心

河内野に千年の畦曼珠沙華

虫時雨平家群読夜もすがら

青毬を踏み割ればなほ白き栗

尾の先の跳ねるがをかし穴惑い

露草の濡るる間もなし須臾の雨

要（かなめ）はづして木鋏を砥ぐ秋の水

みのむしを掌に五つ摘み数へしむ

花芽ふふむ金木犀の忌の日かな

詠みやうの死にやうの勇獺祭忌

夜盗虫寝込み襲ふはわれならむ

老農の厭地（いやち）を云へり秋蒔き菜

「労働者諸君」の吹き出し持つ案山子

倒したる一樹の蓑虫移りける

犀の背のごとき葎や花芒

砲兵父の夜の進軍蚯蚓鳴く

蚊柱やまろき柱の西塔跡

亡き人の思ひほつほつ青榎櫃

今年の実去年（こぞ）の木の実の蝦夷塚

父母の骨納めし尼寺や実むらさき

姥目櫂（うばめがし）伐れば蓑虫移りける

2016. 10

盗掘の穴より萩の零れ花

鰯雲満目の夜を妻の言ふ

犬走りに蟬穴二つ秋黴入

竹箒みぎはの螢搦めたる

二上山（ふたかみ）を隠す霧かも歩に纏ふ

どでかぼちやの重さ評定おほらかや

赤ままを詠ふ余生を悔しとも

銀河果つる国に香華を賜りて

菜の虫は糞（まり）も真青や秋日和

手作りのさしみ蒟蒻茸汁

「労働者諸君」の吹き出し持つ案山子

「天国と地獄」にまろぶ体育日

父母の骨納めし尼寺や実むらさき

業の深きか散りて茎立つ曼珠沙華

減塩になじむ頃ほひ薄紅葉

鰯雲十年の癒し妻と吾に

袈裟斬りに霧吹く母の躊躇はず

鴨も玻璃を隔てる気安さに

露けしや菜虫の糞の藍滲む

鯨尺遺せし妣や藤袴

虫喰ひの熟柿落ちをり柿ほとり

ありてなき日にち葉や鰯雲

朝寒や青紫蘇の種零すまで

吉野葛の包みほどかむ十三夜

子蝟螂鎌やはらかく緑愛(は)し

月の客忘れし声を聞かぬまま

はしり花惜しみて今朝の金木犀

金木犀のほとり箒の花の筋

三世(さんぜ)にわたり笹舟流して秋の水

無垢なるを菜虫潰すや帰り花

捨て所なき盗人萩の種十まり

香りに暮るる金木犀の忌日かな

夕霧や二上山(ふたかみ)の女男(めを)重なりて

妻いねて金木犀の窓を閉づ

金木犀の粒花溜めて蜘蛛の奴(やつ)

三叉のやす傷癒えし紅葉鮎

三叉のヤス傷癒えし紅葉鮎

古書の函落ちて響くや神の留守

櫛紅葉映えて小暗き転害門(てがいもん)

夕暮れてさかしまに着く花野駅

2016. 11

小座布団一つ飛ばして月の友

けもの罨に血の錆びつくや返り花

月の宴悴入れ替へし遺影かな

悴替へて遺影月夜の客となり

綿虫や身に纏ふ風人にあり

小座布団一つ間（あはひ）に月の友

悴替へし遺影を立つる良夜かな

生欠伸かみ殺してや神の留守

せせらぎの消えしあたりにも木の実寄る

心病む村のをなごや根深汁

原子炉崩（く）えて大砂時計冬立ちぬ

フクシマの大砂時計冬立ちぬ

大ロシアにチェルノブイリの雪間かな

大ロシアチェルノブイリの雪間かな

これの世に杖遺しけり翁の忌

綿虫や人はみな風纏ひけり

術後養ふ今年一入（ひとしほ）帰り花

予後を養ふ今年一入帰り花

冬めくや布袋（ほてい）は軸に胸はだけ

大根を桂剥きして砥ぎ試し

貰ひ手の決まりし農機冬耕す

木枯や嬰の埋もるる抱っこ紐

木枯を掃く竹箒うすみどり

運慶の耳にみとるる石露の花
（円成寺にて）

遺影悴けふかはりをり花八手

腸（はらわた）の欠けて傾ぐや昼の月

横臥する落葉もありぬ蝸牛

目に笑みを含み赤子の冬帽子

手を打ちて冬の回廊ふたりきり

霜月のツリー約せぬ待ち合はせ

ひとりゐに経をつづくる冬座敷

河内野に武器出でぬ塚狐の火

喪中がきの字も夕暮れて楓散る

淡海（あはうみ）も運歩するべし枯蠹螂

雪蛭人はみな風纏ひけり

腕組みをまねてるつもり毛糸帽

霜月のツリー点滅楽とずれ

長めの杖も突き減らすまで翁の忌

旅の世に杖遺しけり翁の忌

2016. 12

剥き易しとお手玉みかん呉れにけり

人をへだつる心の在り処冬の蠅

凧の一吹き古家（ふるや）を膨らます

遺影替へてなほ問ふ霜夜かな

芭蕉は知らず終（つひ）の西行冬の月

片口に蒸らす独り茶雪催

孫とゐて仏間に冷えし蜜柑喰ふ

隠り沼（こもりぬ）に水鳥の立つ棒の杭

寄鍋や些少の手抜き咄家も

兵たりしが遺句にはあらぬ開戦日

村の集ひに爛の菓罐の二つ沸く

息白きものの祈りに長短（ながみじか）

煤払ひ嬰（やや）の気になる翁面

翁面煤払ふ髭黒ずみて

漱石の妻も師走の朝寝かな

男より見ての悪妻漱石忌

永らへていのち羨（とも）しき冬苺

極月の二日続きの昼の月

貧乏が話の振り出しクリスマス

はじめてのクリスマスカード子の師より

色落ちせぬかポインセチアに霧吹きて

冬の虹歩を移しても濃くならず

喪中葉書に折り返す文龍の玉

頬の瘦（こ）け父に似てきし冬至風呂

茶の花が遺影の前で咲きにけり

倍生きてこの体たらく柚子の風呂

影踏みて冬のスクランブル渡りきる

枇杷の花ひとつとならぬことを聞く

（薬師寺のお身拭いの記事に）

行く年の僧お身拭ふ顔直（ひた）と見て

2017. 1

一輪の千鳥紅梅初御空

若者の不逞も賑はひ初詣

頭を寄せて嬰（やや）のぞく顔初詣

（叡福寺に初詣して）

一遍ものぼりし石階（いしばし） 去年今年
老いかこつ祖母の聞き役福寿草

（A Iも俳句を詠む時代）

身ほとりは詠めぬA I夢始
読初や抜きては埃払ひをり

老農の姿の見えぬ三ケ日

泣く嬰（やや）に香煙なする初詣

古曆俳画の阿修羅化（ふ）けにけり

龍の玉葉陰に色を損なはず

人日の手うちわゆかし大香炉

上之太子に二層の塔の初御空

身ほとりは詠めぬA I夢始

読初やあとがきに見る師の気魄

老いかこつ祖母の聞き役福寿草

（道明寺にて）

十一面観音の厨子春隣

昼の月消ゆ冬のかわせみ撮る背（せな）に

人日の賀状に若年性の文字

一樹にも夕茜あり山眠る

裸木に風音（かざおと）の妙人とある

冬のかわせみ撮りて昼月見うしなふ

凍蝶の手にもろければ忘れえず

雪催空蟬ひとつ持て余す

風花に縛（もつ）るるものなかりけり

（昔の舞台を思い出して）

風花を舞台に零す筈の底

賀状遣さぬ友の電話や小正月

二上山の女男（めを）入れかはる凍て峠

そろりそろりと参ろうものを雪明り

引用が百に水仙月二十日

ひとつ夢われも夢の記黄水仙

左手を吊り水仙月の月忌（がつき）僧

初冠雪に金剛山（こごせ）寝釈迦の背とも見ゆ

しぐるるやわれのながむるときを

待春の観音菩薩に如（し）くは無し

うつしみやくぬぎ落葉に茜射し

（ワシントンの反トランプデモ）

デモる日の猫耳マドンナニット帽

（道明寺の十一面観音を拝して、三句）

待春の観音千歳（ちとせ）の黒光り

観音のあぎとほのかに冷えたまふ

榧一木の観音風花零しけり

甘塩の目刺は無きか骨正月

煮凝に不安顔なるややこかな

（鑑真和上像を想ひ）

鑑真和上もけふ前かがみ春隣

（道明寺にて、二句）

腹背に仏在（あま）すや廊下冴ゆ

風花に砂紋を踏みて叱らるる

(ワシントンの反トランプデモ)

デモる日の猫耳マドンナニット帽

(劇団四季のキャッツのメンバー)

猫耳が通天閣から豆をまく

陶板の絵雛すがしき音のする

甲斐犬の主も走る春隣

バレンタインデー遺影の前に妻のチョコ

(得生寺、三句)

丈六の脇侍は名のみ春立ちぬ

春立つや法然上人厨子の中

堂の響くや経をつぶやく春隣

春蚊出づ福は争奪するものか

紅一点の孫に女系の雛かな

観音を千年燵(いぶ)して春灯

患へば今年は諦む露の臺

蹲る一人はおしめ犬ふぐり

藁の輪の抜けし白菜納税期

どう転がしても角(かど)の立つ豆鬼やらひ

(道明寺)

腹背に仏像七体冴返る

(近つ飛鳥古墳公園)

浅春や金の耳輪の出でし塚

(道明寺天満宮)

鶯まつり見にゆくと言ふ梅の道

花鋏見あたらぬ夕春の雪

苔食む鸞（うそ） 見たと云ふ雨水かな
青臭さで浄むる厨路の臺

恙（つつが） あることしは露の臺摘まず

（道明寺）

十一面がおぼろに菅公觀世音

バレンタインチョコの御降り夫婦して

人見知り孫が泣き出す雛の前

自閉症の君が先頭梅の道

（若草山の山焼き）

山焼きに持ち重りする全集本

陽炎の窓幸せと云ふ手話が見ゆ

塔ならば仏舍利苦きふきのたう

（近つ飛鳥博物館玄関前）

枝垂れ紅梅どしやぶりの玻璃くだりけり

家族アルバム開けぬ十年（ととせ） 四温光

2017. 3

本復の嫗仕出しに雛あられ

雛の日のエスカレーター止まりをり

いづくより遺影の前のめをとびな

（さる旧家の女雛）

まぶた腫るる女雛いささか気にかかる

啓蟄や母似と云はれし歩の運び

けふよりの余命（よみよう） 芍薬芽吹きけり

（道明寺、試みの観音）

又の名で呼ばるる観音春うらら

耕しや下根子桜の下ノ畑（はた）

（『下ノ畑ニ居リマス 賢治』）

陽炎の窓幸福と云ふ手話が見ゆ
活字踏むなと戒めいまに大試験
耳鳴りも春興の具やにぎはしき
初蝶や孫入学の袋もの

耕しや下根子桜の下ノ畑（はた）

（下根子桜は地名。そこに賢治の羅須地人協会や畑がありました）

枝垂れ梅どしやぶりの玻璃くだりけり
廻廊の声筒抜けや初燕

バーコードと化し病棟の遠霞

点滴の時したたらす遅日かな

春暁や導尿管のワイン色

菜の花の煮浸し載せて配膳車

春逡巡確率と云ふも病かな

（かつて勤めていた養護学校）

奇声と云ふものの力や卒業式

（道明寺）

試みの観音初音を聞きたまふ

（亡父）

麻酔なき貫通銃創紫木蓮

（得生寺）

亀鳴くや丈六仏は伏目にて

（入院時手首にバーコード）

バーコードと化すたはやすさ四月馬鹿

土削る鋤の刃に葦匂ひけり

切り干しに赤かび付きし四温かな

溝浚へ賢治は農に容れられず

庭葦鎌の勢(きは)ひに過(あやま)てり

さきがけの枝と聞きしが花苔む

(古墳公園に謡する人のいて)

古墳(ふるづか)に初音と競ふ謡かな

過ちて合掌難き彼岸僧

(退院して)

ふらここや身の内濯ぐごとき風

2017. 4

目を合さぬ君が先頭初ざくら

聞き做しの耳なきわれや花辛夷

(昨年左腎臓摘出)

ろ過装置一つはづされ四月馬鹿

(減塩食)

待つともなく待つ薄塩の花菜漬

初ざくら妻は日傘をさし始む

剃り残しの髭そつてゆく花の山

己(し)が寿命知らず桜の寿命云ふ

(義兄)

待つとなく病棟に待つ初ざくら

花三分見上げて探す昼の月

蝦夷塚にほど遠からず花辛夷

車椅子の犬も菜の花隠れかな

後ろ向きの試歩にたんぽぽ遠ざかる

阿修羅より掻き出す粘土山笑ふ

高貴寺にほど遠からぬ蕨の巢

われも兄逝きし子も兄初蕨

寝たきりの若きを押して花菜道

春愁や大江を読まぬ五、六年

春暁の看護師に見すバーコード

背伸びしてお練り供養や草の餅

花衣染井吉野の寿命など

亀鳴くと丈六仏の伏目かな

ふらここや身の内濯ぐごとき風

切岸の草戦がせて春日傘

包みにくき縮の袱紗春愁ひ

河内野に頭（づ） 大き仏葱坊主

たんぽぽの軸で持つしかなき絮毛

旅装解く花の波紋の道に来て

木の股にででむし山椒枯れにけり

鶯の声にも豊満あるごとし

チューリップ折り紙名人肘枕

（聖徳太子御廟のある叡福寺）

揚雲雀太子の寺は阿らず

山椒の枯るれば去年（こぞ）の木の芽和

黒革のチェロ立ちて春のエレベーター

（弘川寺にて）

西行の谷駆けくだる花の風

たんぽぽの絮呆けては重なるも
チューリップ手折るに妻は躊躇はず

(近つ飛鳥博物館)

銅鐸の音はこんなか亀鳴けり

(CT検査)

息を止めてと啻(ただ)には聞けぬ薄暑かな
病変喻ふオープンサンドの春野菜
駅ナカに尻尾の切れし蜥蜴かな

2017. 5

原子野に摘む十薬もこの匂ひ
気散じと寝かされてをり武器飾り
フリル嫌いで通して妻の花水木
山椒枯れてまた棘を買ふ目借り時
豆飯の豆の浮上も理論あり
たなごころ四分六に切る冷奴
夏帽のままレントゲンとはゆかず
破滅派にふとあくがるる夏帽子

(5月3日)

初夏の雹散弾白きネガフィルム
和解して逝かむと思ふ昼寢覚
やまかがし轆かれてゐると太子道
蛇の死に人を呼び込む薄暑かな
たんぽぽの老い呆けては丈高し
初蝉を聞いて数日(すじつ)の立夏かな
母の茶道具まだよう売らず新茶汲む

草笛や孫はじめての草の味

フリル嫌ひで通して妻の花水木

剥(む) きこぼしはずむこころや豆の飯

蛇の死に人を呼び込む薄暑かな

母の日や「気散じ」「寝ぞろ」は妣(はは)の声

若楓駝鳥の如く夜雨の中

(親戚を見舞って、六句)

紫蘭咲く家に余命を訪ねけり

癌癒やす君が奢りの穴子鮓

穴子鮓義理の縁の一期(いちご)かな

痩せ痩せて夏の帽子の深々と

蝸牛かたみに今際おだやかに

明易しホテルに似非の現代史

沢の如し葉桜を打つ雨音は

人の香に触れし子燕返すべく

蟬七日空蟬年を越えにけり

手術跡空蟬の背に縦ますぐ

パートカラーに苺大福あざやけく

(三代目)

かきつばた春団治まず羽織脱ぎ

濃きまでに空映す玻璃燕死す

(Y君との思い出に)

入れ喰ひの竿休めれば蜻蛉来る

(飛鳥にて)

風の道謀叛の道や栗の花

2017. 6

短夜や湯呑みを水に寝かせ置き
水やれば土浴ぶる墓跳び出せり
走り梅雨寝耳に注ぐ雨の音

(風土記の丘、一須賀古墳群)

古塚の百基に響く牛蛙

(逝きし人に)

天の川果つる地に果つあはれとも
ほうたるを見たと云ふ妻問ひ詰めず
幽明を越ゆるとすればほうたる
短夜の湯呑みを水に横たふる
ヒロシマにまず生え初めし十薬と
走り梅雨寝耳に注ぐ雨の音
蝸牛色鉛筆の糞をする

(弘川寺にて)

緑蔭の西行墓標八百年遠忌(おんき)
時の日や露子がドンを聞きし寺内町(まち)
王陵の谷に水張る植田かな
玉音の正午睡蓮閉ぢはじむ
地に下ろす種にも厭地梅雨早
丸き鍵盤あれば紫陽花のかたち
川筋を遊行する風合飲の花
捨て臼の穴に十薬ひしめける
噴水も衰ふるもの影薄し
蛍這はせ半跏思惟の指となる

玉虫や金の耳輪の出でし塚

声漏るるほどの悔いありえこの花

わが弓手（ゆんで）棘深々と夏薊

夏薊指紋に棘の血が滲む

翁面笑ひてをりぬ昼寢覚

瘤性の雷鳴に雨降りはぢむ

老鶯のふくらとなりて声の艶

蝸牛山椒の棘も苦にならず

緑蔭に犬の遺骨を持ち来たり

（近つ飛鳥博物館の玄関）

安藤建築にも燕の巢打ちつばなし

枇杷の如き尻突き出して燕の子

河内野に狐火絶えてほうたる

蛍か蛇か竹箒もて汀掃く

ほうたるの流れに落ちて瞬（まじろ）がず

竹箒みぎはの蛍搦めたる

蛍這はせ半跏思惟の指となる

ほうたるやたましひ二十一グラム

幽明を越ゆるとすればほうたる

ほうたるを見たとき云ふ妻問ひ詰めず

（柿古木を伐る）

白雨やみて柿の年輪幽かなり

（得生寺にて）

丈六の脇侍は名のみ涼しけれ

不機嫌は隠しおほせず牛蛙

切岸のひと日遅れて滴れる

正客になれないままに窓守宮

2017. 7

(得生寺薬師如来)

初蝉や耳に金泥のこりをり

あとしぎる蝉は退路を断たるも

(海老蔵さんと勸玄くんの宙乗り)

初蝉やけふ宙乗りの高み得て

こしよれ地蔵のこしよれは腰折れひめじょおん

(近つ飛鳥博物館特別展)

古鏡五面睡蓮のごと伏せてあり

川筋を逆行する風合歎の花

瘤性の雷鳴に雨降りはずむ

(叡福寺)

一遍の訪ひし寺道をしへ

サシで聴く河内音頭や缶ビール

(安江不空)

羅や不空の軸に折り目あり

噴水も老いて阪急三番街

塀越しに関(とき)の声あり凌霄花

ひぐらしやつくづくひとの死の序(ついで)

(劉曉波氏死去)

遺灰と声いづれ懼るる初蛸

初蛸父母の声忘れ果つ

(近つ飛鳥風土記の丘)

かなかなや深山（みやま）に古墳暴かるる
かなかなや吐息の壺は幼にも

（近つ飛鳥博物館）

端居して展示古鏡のジグソウパズル

妻がまず立ち止まりたる草いきれ

墓石に数珠かさねおき遠廻

残生はひぐらしの道逝くばかり

麦藁帽子昼の星座に仮寝かな

刃こぼれの鎌の手触り夏の月

夏回廊遊び心の杖の音

風鈴や良寛の身のまかせやう

父の亡き部屋の風鈴翁面

向日葵や卑弥呼の鏡百余枚

菊挿すや父晩年の花鋏

（津久井やまゆり園事件一周忌）

山百合や名ハ享年ノミ黙禱ス

庭よぎる蝶の道あり涼しけれ

窓越しに蜜柑の花の夜の香り

手花火や仏像の爪幼爪

こんな句じゃないと風鈴扇ぎをり

2017. 8

（PL花火大会三句）

存へて去年（こぞ）のなごりの昼花火

先客の白髪染むる遠花火

（十数年前病院で）

父を看取るや看護師の訊く花火弁当

蚊柱や柱で数ふるものの幽（かそけ）さ

ベランダに蝙蝠のゐる甥新居

（拝啓宮沢賢治様）

銀河鉄道の窓からピカを見ましたか？

（俳人松尾あつゆき）

第二芸術などと思はず長崎忌

（賢治忌にブラジルで逝った人に）

賢治忌のポルトガル語の遺灰証明

「息を止めて」と擬死を死にをりこがねむし

（先祖の墓参り）

いく柱蚊柱のごとき幽（かそけ）さに

父母の缺遣れりかねたたき

せめてもの水もり上げて墓洗ふ

（七十二年とは云へ）

玉音とほく原爆ちかし八月忌

玉音の正午の時報涼新た

奥山にかなかなの波引くばかり

広隆寺 六句

（広隆寺の弥勒菩薩半跏思惟像、靈宝殿のあまりに暗ければ）

月白の暗きに半跏思惟仏

月白の月待つ心弥勒仏

辺りして半跏思惟の月の客

五十余像を統べて半跏の月のゑみ

月白に邪鬼も清むるゑまひ仏

月白に深手いたまし千手観音

永観堂 五句

(水琴窟に異国の人々群がりて)

耳集ふ水琴窟の秋暑かな

(素足で歩く異国の若者)

秋の素足や頭上注意の階(きざはし)に

金の耳見返り阿弥陀の逝く花野

(夕べに供華を換へて)

竜胆を宵の阿弥陀に挿し換へて

廻廊に秋暑の鯉の動かざる

(読経を早回しする僧)

早回すつくつく法師の有り難み

数となる死の軽々し螢籠

(広隆寺靈宝殿のあまりに暗ければ)

夏帽子取り月白(つきしろ)の半跏像

(広隆寺靈宝殿の前の池に蓮の実)

仰向けの邪鬼も哀れやはちすの実

(永観堂 見返り阿弥陀)

金の耳ひたと拝みぬ晩夏光

見も知らぬわが匂となれや曼珠沙華

月光が菊の挿し木を傾けて

螢籠数となる死の軽さかな

(永観堂)

見返りの弥陀に花換ふ夜長かな

新涼や頭上注意の階(はし)素足

(『賢治先生がやってきた』の公演で)

天の川舞台の壁に風孕む

(近つ飛鳥から)

山むかふ遠つ飛鳥も良夜かな

月光に菊の挿し木の傾きて

喰らふ浄土喰はるる浄土枯蝻螂

俳句なぞ詠んでるときです朱い月

(あべのハルカスにて)

エレベーターに黒革のチェロ月の友

石鏃を見せびらかす子いちじく爆(はず)

玉音の正午空蟬の傷ますぐ

夏痩せや句集まるごと追悼句

河内野に頭(づ) 大き仏良夜かな

風鎮の見つからぬまま秋思かな

いじられキヤラの戦闘モード子蝻螂

宵闇やくつつきむしが裾につく

甲斐犬と駆くる老骨葛の道

登高や定点カメラに友の妻

鶏頭や山壁見ゆる父母の墓

蝸のはや鳴きをさめ悔い残る

阿修羅像もCT撮る世のとろろ汁

老いてなほ繊細なぞと曼珠沙華

第二芸術半ばは噛めぬとろろ飯

(昭和十三年十月ヒトラーユーゲントが千早城跡に)

ヒットラーユーゲントの道曼珠沙華
人の灯明わが火に継がず曼珠沙華

(村のお墓)

彼岸花供華に隣りて供華ならず

彼岸花の畦の蝮に農走る

地に口づけることなき国の曼珠沙華

母か妻かの車椅子押し萩の花

雀蜂巣を響(とよ)もして月朱く

晩年の隠れ煙草や月の暈(かさ)

(得生寺の丈六阿弥陀仏は伏し目がち)

丈六の伏目に高き紫苑かな

(明和七年九月オーロラを見た記録)

秋桜オーロラ見たる京の禰宜

忌の朝(あした)金木犀の花ほとり

残り雨木犀の香に辺(ほとり)せむ

風の子の風持ち来たり花芒

木の又に緘銃(おどしづつ)聞く子でありき

吾(あ)を生きるいのちや真夜の虫しぐれ

汝(な)を生きしいのち遺影の紫苑かな

2017. 10

(ブリュッゲルの「バベルの塔」)

待宵やバベルの塔の雀蜂

自灯明金木犀が花降らす

花芒風なき堂に風入るる

焼け焦げて月夜の電柱彼岸花

蛍草十一年の忌が過ぎて

神獸鏡の伏せ置かれたる良夜かな

比喻でしか触れ得ぬものも良夜かな

いつよりか邪鬼ばかり見て蚯蚓鳴く

(道明寺の聖徳太子立像)

厩戸(うまやど)ノ皇子十六の秋思かな

人の世と和解せぬまま吾亦紅

鵙鋭声一日(ひとひ)遊ぶはわればかり

憤怒像文机に敷き秋灯

(聖徳太子御廟のある叡福寺)

親鸞も訪ひ一遍も訪ふ秋暑かな

(叡福寺から當麻寺への道標)

右たゑまそれより読めぬ萩の道

(西方院)

花筒を洗ふ媼の秋暑かな

(賢治の詩「青森挽歌」より)

夜寒さの客車の窓の魚族かな

星座には直線ばかり捨案山子

故郷にさかしまに着く秋の夜半

左腎取られ灯りし秋蛍

亡き父の貫通銃創蟬の穴

楔形文字まだ解けずいのこづち

秋蒔きの濡れ土浴みて墓蛙

(ギョツラフ訳ヨハネ福音書)

「ハジマリニ カシコイモノゴザル」露の玉

憤怒の茶髪路上に跳ねて月ライブ

(猪撃ちの猟師の語る)

水桶の月に猪より真ダニ落つ

秋霖の漏れきて妻の華やげる

帰郷とはさかしまに着く花野かな

耳を掘る秋思穴なき仁王像

阿修羅像虹差し渡す手の形

影なき子金木犀の花の暈

2017. 11

新喜劇跳ねて時雨に開く傘

時雨るるや彼の居ぬ間の犬のこと

レコードに針落とす音ちちろ鳴く

「Hello Goodbye」が耳を外(はづ)れて雪婆

老いの死にいつしか淡し栗ご飯

現し世は前立ち拝む石露の花

エレベーターの静寂(しじま)かぼそき虫の声

(得生寺の丈六阿弥陀佛)

玻璃の影に丈六透けて秋の雲

身に入むや写真の裏に母の筆

冷まじや末路哀れも芸の内

だんぢりの小車(をぐるま)木の実ひろひかな

(近鉄電車で古市から橿原神宮前へ)

一上(ふたかみ)の女男(めを)入れ替わる山紅葉

(天平乾漆群像展)

阿修羅秋愁母の祈りの臍(ほぞ)ひとつ

秋の声失せて阿修羅と直（ただ）にをり

南京黄櫨の紅葉阿修羅の顔に映ゆ

右手失する緊那羅（きんなら）の弾く秋の楽（推敲）

（なら仏像館）

百体の仏楽しき花野かな

（奈良公園）

飛火野に角なき鹿の夜寒かな

遠二上（にじょう）鹿わらび餅二月堂

散歩杖葎にあづけ翁の忌

葛井寺厨子開かぬ日の石露の花

時雨るるや父憐れみし父の歳

綿虫や老老が肩押して添ふ

河内野にべっぴんさんの大根かな

灯明田と代々呼ばれ冬耕す

ぎこちなき柏手に散る紅葉かな

枯葉逝く音聞かためたに耳空ける

無愛想な神ばかりなり神の留守

腹腔鏡の痕凹みをり穴惑ひ

（天平乾漆群像展 三句）

秋の声失せて阿修羅に直向きに

秋愁ひ皇后（はは）の祈りの臍（ほぞ）ひとつ

半券の阿修羅も眩し秋日向

犬出汗にして彼の不安を冬めきぬ

父の胼マタモ負ケタカ八連隊

曇りガラスを下から拭けば風邪の鼻

ジャグリング芸大祭に間に合はず
養護校の子らの手かりんにほひけり
セーターをかぶり三面六臂かな
ロボットの握手優しき芋煮フェス
犬出しに彼も不安の息白し

（「祝南京占領」の幟と南京神輿）

「祝占領」の南京神輿に銃後の母
着ぶくれて業者泣かせの仏の手
逆しか会へぬエスカレーター日短か
老いの計にいつしか淡し神無月
河内野に初雪にして一夜雪

しづり雪エスカレーター降り立てば

2017. 12

自動ドア後ろで閉まる開戦忌

（神戸港に巨大クリスマスツリー）

ミサイルを運ぶ車輛で聖樹来る
煮凝りやおさなが小骨舌の先

ペア帽子老老の試歩冬紅葉

実南天供華に加へてすでに落つ

子に一つ未刊の論文龍の玉

冬苺兄弟が老い吾も老ゆ

メタセコイヤの朱くふぶくや開戦忌

二十四時間介護の君に去年今年

檜葉垣の脂（やに）匂ひきて日短

鴛鴦や父の形見の赤マフラー

あかんべえアインシュタイン着膨れて
言ひ淀む「じゅうりゆうしせん」息白し

河内野に初雪にして一夜雪

ハンチング揃ひの試歩や返り花

マスクして阿修羅に魅入る車椅子

空蝉を葉裏につけて青木の実

倫敦の焼芋の味漱石忌

レノン忌や養護の子らは平和の徒

車椅子の老婦あふむく大聖樹

極月や畳の部屋の夜の匂ひ

昔見し狐火孫に云ふべきや

着膨れてざしきわらしでありしころ

痩せぎすの仏もゐます冬木立

壁ガラス老いの不様の漱石忌

極月や山椒の枯木押し倒す

昼の月いくたび見ての柚子湯かな

大根すりかけらを妻のほほばりて

ドライアイの目薬を買ふ降誕祭

ポインセチア抱へパジャマのやうな服

数へ日のあはや階段踏み外す

数へ日のレジ牛蒡切る小包丁

掃納煙にシャドーボクシング

天つ日々刹那に失せし霰かな

大年の翁の髭の煤けをり

除夜の坐に線香すでに改まる

除夜詣千手の寺の蛸の足
なかなかに榾火くすぶる除夜詣
形よき孫の頭や伊勢神楽

2018. 1

「君たちは・・・」を漫画で読むか古希の春

(漫画版「君たちはどう生きるか」)

(氏神様に初詣)

榾舐める火のはためくや初詣

大阪駅にビッグイシューの御慶かな

(正月のラジオ)

棒読みの名乗りめでたき初狂言

(養護学校の卒業生に)

慮れば辞め得ぬ賀状教へ子に

去年今年銀河の風の吹き下ろし

鏡餅布袋の軸の重しかな

御降りや一つ覚えの賢治の詩

(孫は翁面が怖いようで)

初笑ひ嬰(やや)の気になる翁面

地袋に提灯古ぶ狐火や

子規の一世の春夏秋冬梅一輪

独楽傾ぎ猫は相手にせぬつもり

水仙や蓮如名号煤けをり

水仙月の時刻表見て越の妻

越の妻水仙月の空を云ふ

成人の日の屈折のままに古希

古（いにしへ）も七種粥を噴きこぼし

ボーイソプラノ孫に添ひ寝の除夜の妻

読初や客座蒲団に獏詩集

霜晴や「大和」に死して墓碑尖る

鉄条網のむかふが似合ふ水仙花

抽斗の独楽星座盤色鉛筆

枯芒呆けて風の道忘る

（阪神淡路大震災の日に）

水仙の土堤切る淡路断層や

つぶやける鉱石ラヂオ雪催ひ

裸木の紫に妻肯はず

女正月息子の夢記書き加ふ

焦げ蜜柑末法の世のとんどかな

（賢治の両親を思い）

風花や昇天を子に迎へらる

水仙の土堤ぶち切り淡路島断層

初旅や阿倍野で買ひしビッグイシュー

初笑ひ嬰（やや）の気になる翁面

寒晴や漣 沼の半ばまで

賀状戻りし教へ子からの寒見舞

葱太し古希よりの生（しょう）いかに生く

（病院でCT検査）

肝胆の隈を照らされ寒の水

（村の墓地に戦艦大和の乗員の墓）

霜晴や「大和」に死して墓尖る
骨正月亡き子の夢記書き加ふ

(二上山の冬霞)

相聞にまがふ哀しみ冬霞
薄氷やうつしみの刃をこぼしつつ
散弾のテロル地を撃つ夕霰
へそ曲がりはどこにでもゐる霜柱
兵たりし父に枯野の匍匐前進
葱折るる阿修羅の細き腕(かひな)かな

2018. 2

春立つや水菜はいまだ苦からず
寒明けや障子の溝に蠟塗りて
豆まきの声すでにして恥づかしげ
山焼きに民喜全集持ち重り

(トランプ政権が核戦略見直し)

矮小とは言へ核は核鬼やらひ
雲降る獺さんの詩にあたたまる
寒明けや障子の溝に蠟塗りて

(道明寺菅原道真作試みの観音像)

梅日和笑(忍)まし菅公観世音
漣に刃こぼれしつつ薄氷
山焼きに天金の古書持ち重り
老いの死にいつしか淡し春の風邪
コピー機に忘れ傘あり納税期
天袋に若き母ゐる臃かな

春の雲遠き祈りは思慕に似て
理科室にプリズム青む余寒かな
冴え返る人体模型拭ひみて

(聖徳太子御廟のある叡福寺 二句)

街道は塔にますぐや涅槃雪

春の雪足跡に祖師あらはるる

(雨水 五句)

花のはざかひ一臓なくてけふ雨水
供華に挿す折れ水仙も雨水かな
一臓なくて三つ賜る露の臺

露味噌のほひ二人の家に満つ

彫り深きタイヤの無体春の泥

(石牟礼道子「祈るべき天と思えど天の病む」)

天はやはり病んでいますか露の臺

歳時記の小口鶯餅の粉

猫柳男(お)の子も含み笑ひして

(養護学校の理科の授業で)

人体模型の組み立てパズルミモザ咲く

(金子兜太氏に「大頭の黒蟻西行の野糞」(河内弘川寺)の句)

大頭の観音おぼろ兜太逝く

(「苦海浄土」の石牟礼道子氏逝く)

道子に秘めし歌のわかれや冴返る

2018.3

雛の夜の雛すでにして帰心あり

いづくより遺影の前の陶器雛

地に口づけよとソーニヤは言へり落椿

兵たりし父の南京風あがる

坂ころがりて春泥の檸檬かな

うたた寝の葉となれや桜貝

をさな子の大き突っかけ青き踏む

芽柳やをさな子の髪ほつれたる

初燕安藤忠雄の打ちつ放し

人体模型の組立パズル花ミモザ

(台湾の観光客に写真を頼まれて)

梅咲くやジャンプ撮るやう片言で

(3. 11で亡くなられた人の七回忌)

春光や海にたむくる花に紅(こう)

(3. 11犠牲者の八回忌、二句)

春潮やたむくる花に紅(こう)まじへ

結局は跳べぬふらここ海に向き

(六波羅蜜寺 空也上人立像)

胃カメラや空也上人寒念仏(かんねぶつ)

胃カメラのおぼろ空也の口をして

(長楽寺 一遍上人立像)

巖かや一遍上人青き踏む

詫(わ)びながら補聴器はづす初音かな

(路傍に孔雀の小屋)

河内野の春逼塞の孔雀かな

大仏も窓鎖(さ)したまふ松花粉

(ホーキング氏は晩年合成音声で話していた)

ホーキング氏の声音遺れり星隴

(一臓足らぬわが身)

人体模型一臓足らぬ万愚節

轉りや人の臭ひのつきし雛

木の股に明恵上人轉れり

(自分を顧みて)

遠初音師の戒めし自己模倣

抗癌剤に友のむくむ手初桜

(授業で教えるなら)

半減期の喩へに吹雪く桜かな

たんぽぽや金の耳環の出でし塚

雛納めひとのほひのつきしゆゑ

(「逢花打花 逢月打月」)

花打つに新聞まるめ月も出よ

車椅子に頭凭せて花辛夷

日常の俳句は異化や花菜道

咲き満つる花の淡さや昼の月

盗掘の古墳華やぐ飛花落花

「once more」浮遊写真の四月馬鹿

おのづから心根(こころね)見せてチューリップ

2018. 4

轉りや肩に乗る子も耳立つる

銅鐸の音はこんなか春惜しむ

眩しみてぶあいそな嬰(やや)うららかや

初桜高貴寺までの尾根伝ひ

上り框（がまち）に置き葉箱紙風船

牡丹の花の十日を余命とも

新社員スマホに桜咲かせをり

電動の声帯喉に種物屋

老い萌す身の衰へや竹の秋

野遊びや父にならひし匍匐の字

（心経一つを覚えて）

なけなしの般若心経葱坊主

たんぽぽの家族をわかっ電気柵

メーデーの流れ飛火野にビラ敷きて

春の雫井戸の水面の揺れやまず

神獣鏡の彫り深くする春の月

初蝶や左右（さう）に列なすめおと墓

写真部の遠足浮遊写真から

春の水にほふスーパー歌舞伎かな

2018.5

（座敷に兜を飾る）

新樹光に飾り金屏立てにけり

燻し銀御陵の谷の野藤かな

春昼のわが経いまはの耳で聞く

芍薬や二十歳の母を訝（いぶか）しむ

（父か母が遺しておいた昭和二十一年の官報号外）

憲法の官報号外雲母虫（きらら）かな

（CT検査）

むらぎもの影を濃くする立夏かな

葉桜や落し文など妻の云ふ

(朝日新聞阪神支局襲撃事件)

五月の雹散弾白きネガフィルム

(ETV特集「わが不知火はひかり凧」の石牟礼道子)

遺書書けぬ死者もをります草の笛

なじめぬものまずは古里豆の花

(散歩道で)

喜寿過ぎの迷彩服の薄暑かな

(朋来る)

抗癌剤の間(あひ)か筈たづさへて

貧乏の味伝はらず麦の飯

ナイターや黄色き野次も河内ぶり

エレベーター開く薄暑の御堂筋

玻璃窓に新樹のいぶき残りけり

生意気のさかりも吹けぬ草の笛

石楠花や村の女も鬱を病む

ホーと叫び賢治も跳ぬる清和かな

濃紫陽花村の女も鬱を病む

(目の手術 二句)

目の手術その前日のおほでまり

唼焼くレーザーメスの薄暑かな

(唐招提寺、普段はお身代り像ですが、六月に鑑真和上像の開扉があります)

お身代わりも鑑真和上も薄暑かな

(賢治に「父よ父よなどて舎監の前にしてかるとき銀の時計を捲きし」の歌あり)

父の日や賢治の父の銀時計

豆の花村の女も鬱を病む

エレベーター開く薄暑の屋上階

腫れ目して蝮しとめし手柄聞く

長靴の一声漏らす植田隅

帰り来れば向日葵五体投地して

蚊遣香紫煙の皿を回しけり

ナイターやノアの方舟人で溢れ

2018. 6

(救世観音 二句)

夏痩せや救世観音を格子越し

大いなる救世観音の夏埃

夏痩せや膝打つ父の癖継いで

死ぬ時が死ぬる時節か松落葉

術後の目卯の花腐し聞くばかり

老いの夢かの世に繋ぐ三尺寝

(叡福寺の聖徳太子御廟)

御廟寺の塔は二層や夏燕

卯の花腐し御廟の香(かう)も地を這へり

籐椅子や膝を掌で打つ父の癖

三代で植田の隅を手植ゑけり

さりげなく補聴器見する青葉騒

兵式飯盒次々噴けり父の日に

香煙の尽くるまでゐて五月晴

足持ちてややの尻ふく走り梅雨

手水鉢百足逃がせし悔ひ残る

妻と来て今宵予感の初螢

おもむろに老いは来たれり宵螢

安東次男に「飲食に性頭はるる大暑かな」の句あり

枇杷を啜るや種噛みて性（しやう）頭はるる

竹落葉に足滑らせて蝦夷塚

神獸鏡のジグソウパズル梅雨晴間

山百合や古山椒の枯れし跡

小面の記事に包（くる）みて百合たまふ

（以前、近つ飛鳥博物館にて）

古鏡展に卯の花腐し雨漏りす

上目遣ひも邪鬼にかひなき走り梅雨

夏蜜柑剥きて香りの虹立つる

（MRI検査を受く）

縛されて掘削音に耐へて夏至

ナイターやノアの方舟人で溢れ

かたつむりその残生の軽きこと

雨は乱打四葩は和音奏づるか

梅雨旱蜂に刺されし腫れ痒き

2018.7

（養護学校にて）

サングラスの目を覗かるる教師かな

鮎焼くや化粧の塩も薄うして

初蟬や逝くものに耳遅るると

谷崎源氏そろはぬ母の曝書かな

(河内弘川寺)

八百年遠忌の標(しるべ)夕焼けて

山小屋に缶のポタージュ御来光

芸大の助手仮住まひ青葡萄

甲斐犬が男日傘を引いてゆく

キャンプファイア手話コーラスの影深く

サングラス前川清のレット・イット・ビー

木の橋に水迫る夢梅雨出水

頓首でしめる百歳の文凌霄花

晩年のすでにさびしさ花氷

巣が転げ炎天に蜂猛りをり

短めに経切り上げて夜の蝉

(養護学校の職場実習)

扇風機流れ作業に酔ひし子に

滝壺に邪鬼踏むごとき水泡(みなわ)沸く

かなかなやゆふべの死者とすれ違ふ

さからはず溽暑老人力矯めて

空蝉や命の爪をなほ立つる

(義兄逝く 二句)

脈消えてほうたるの灯に義兄(あに)逝けり

飲みさしのビール死者置き席を立つ

天神祭二日続けて昼の月

金魚玉落つる刹那の無重力

(近つ飛鳥に住まひして)

日雷遠つ飛鳥に謀反かな

アイスクャンデー滅多に買はぬ母なりき

子子やオーフラ・ハーノイ手書きの譜

南田堂に煙たき邪鬼の昼寢覚

黒い雨のメッシュデータや大向日葵

一村が夕焼の照り帰るかな

たまさかに父の風鈴部屋に鳴る

(教え子に風を恐るる子。でも彼は笛が得意でした)

草笛や顔吹く風を恐るる子

2018. 8

(入院 五句)

癌病室歩く夜店のもくずがに

端居して老病名主の遠目かな

看護婦をはやも手なづけ遠花火

古参兵のごとき患者や夏の風邪

バーコードの腕輪外され草いきれ

(近つ飛鳥博物館特別展「慈雲尊者と高貴寺」を観て)

「打月」と云ふ墨蹟ありし慈雲展

けつきよくは布袋の軸で夏を越す

台風親しかつて雨戸を押し合ひし

噴水の見捨てらるるも哀れかな

(原爆二句)

掛け値なしに田水沸きたるかの日かな

手団扇で消すらふそくの蕊光る

ミニトマト点して枯るる原爆忌

かまけゐて夕かなかなに黙禱ス

(八月十五日大仏殿の観相窓開く)

大仏の窓開かるる涼新た

白湯で飲む薬や母のすりりんご

(ブラジルに逝きし人)

天の川の果てで封する遺灰証明

リトルボーイがファットマンとや秋立つ間

「オーマイガツ」とたやすく云ふな原爆忌

法師蟬も参戦したる長崎忌

原爆忌雲遠ざけて昼の月

われの一世に踊りの司会したること

きつねのかみそり一発芸はそれかぎり

玉音をきっかけに劇動き出す

手花火に飽きて焼くもの探しをり

(ろう学校の教師と)

遠花火手話のつぶやき見逃さず

(ブラジル往復)

一泊五日さかしまに着く月の帰路

(大腸内視鏡検査)

孟秋の大腸カメラ持つ異形

(永観堂)

扇風機みかえり阿弥陀御前に

蚊遣香瓦斯に灯せる父を見き

十薬のごと指さして父逝けり

赤猫餅を母の臼取り半夏生

麦とろや写真のカフカ眉毛濃き

古鏡研ぐ手触り硯洗ひけり

秋の蚊の相撲取るまでいつ太る

(原爆開発を促す大統領宛の手紙)

八月のインシュタイン悔いて老ゆ

水抜きに蛇の垂(た)り尾のふためける

蛇唸し半ば過ぎゐて引き返す

雲の峯賢治に墓(ひき)の雲見あり

鬼灯の色して今夜(こぞ)の火星かな

翁面の髭煤けをり竹の春

秋扇病衣の腕のバーコード

闇底に火打石打つ鉦叩

市上人の口より出でし葛の花

台風親しかつて雨戸を押し合ひし

人思ふ壺はむらさき思ひ草

梯子降り屋根屋が見入る曼珠沙華

まむしかと彼岸花踏み声に寄る

(だんじり祭りの掛け声)

「チョーサジャ」の声ほむらだつ彼岸花

障子貼る母の霧吹き口で吹く

いのち詠むべし病棟に見る細き月

虫の闇病百床の電子音

広島絵地図鬼灯一つづつ

水澄みてジョバンニの指屈折ス

あかときに日ごと色えて曼珠沙華

空蟬の縦一文字阿修羅の背

(十三回忌 三句)

子の忌日また賢治の忌良夜かな
無花果のぼりと映る遺影かな

一泊五日桔梗の夜暗(やあん) 遺灰抱へ

盗人萩咲きて萩咲き友逝けり

金木犀ひかりの粒のごとく降り

軍事機密の風でありしよ秋桜

ものぐさになりて老いゆく地藏盆

2018. 10

人柄の肌理(きめ) というもの秋灯

四つ折りの父の杖出づ秋桜

病床に露けき惑星(ほし) のつゆの刻

金木犀の粒花にして波の花

お弁当もつてきたかと木の実の子

秋夕焼河さかのぼりくる茜

赤のままむかし一日に三万歩

鳴鳴きて金木犀の花降らす

(昭和十三年十月ヒトラーユーゲントが富田林にやってきた時の話を聞いて)

鰯雲来たるヒトラーユーゲント

手術(オペ) 決まり真昼の月を見失ふ

(病室は七階)

翡翠に秋の日差しや明日のオペ

剃毛をさかしまに見て蜘蛛垂るる

窓の蜘蛛オンコールといふ手術待ち

手術室は青い菌の帽子着て
酸素吸う蜘蛛も待ちみし四人部屋
漱石の粥が喰ひたし竹の春
一臑一腑なき身となりて貝割菜
四分の三の林檎残して点滴ス
昼の月茜に染まず十三夜
老いの死に淡しと思ふ十三夜
あーあと云ふていつかは死ぬる夜長かな

2018. 11

一蔵一腑なき身ほとりの花野かな
うそ寒や深手抱へてそぞろの歩
末枯れて漆紅葉になほの色
われの一生（ひとよ）に漆紅葉のごとき人
たとふれば尾で数ふる代の花芒
姉に凭りおとんぼ殊勝七五三
侘助と妻に教へて父逝けり
小春日や後ろ姿の並びたる
古書三冊の匂ひ書棚に冬を置く
冬うらら老いて恙も淡淡し
表札に指押し当てて嗚咽互つ
自転車で追ひ来る影や冬夕焼
聖夜悲し子供心の聴ければ
紅テント番ひ梟夢うつつ
昼の梟番ひて雌雄不分明
二語文を鳴いて見せてよ青葉木菟

王陵の谷はかざみち芋煮会

下読みできぬ放送原稿十一月

歎異抄に言葉灯れり石露の花

今生の悲喜置き去りに竜の玉

狐火や母もおんなじ夢見しか

うちつけの放送原稿十二月

返り花麻醉が醒めてよりの齟齬

2018. 12

義母の酔海鼠噛み切れぬもの噛めるもの

水琴窟に青い目集（たか）る開戦日

引きこもる少年の窓山眠る

自ずから落葉する気の色残し

社会鍋離れて一人ビッグイシュー

笛好きで煽る北風恐るる子

墓じまひの話など出て爛熱く

（聖徳太子廟叡福寺）

一遍も踏みし石段日向ぼこ

老鶯に手術してけふ笹子鳴く

水仙や薬の白湯ににほひけり

研して聞き取れぬ声開戦日

墓じまひの話など出て薬缶酒

初霜や白の輪郭と云ふ技法

賀状一筆白湯（さゆ）冷めてゆく手暗がり

（捨て子の風習、吾もまた）

かりそめの「捨て子」の吾か着膨れて

湯豆腐や掌の上で切るたなごころ

病棟に時雨を知らず妻に聞く

天の川の川湯に柚子の一夜かな

(愚陀仏庵の漱石)

子規の咳二階に聞くも地獄かな

(聖徳太子御廟叡福寺)

お大師さんも踏みし石段ひなたぼこ

母の霧吹き障子に昼の天の川

吾子聞きし聖夜の鈴を孫も言ふ

(手術の予後)

夜二回起きるも聖夜の鈴聞かず

ほぼあふむきに聖樹見あぐる車椅子

吹き抜けの聖樹見おろす老いの席

村一軒のクリスマスケーキかもしれず

半減期を帰れぬ民や去年今年

クリスマス休戦もテト休戦もなく父よ

武器としての性暴力とや鎌鼬